ちうさくは、河海抄ぞ第一の物なる

相田　満

要旨　『源氏物語玉の小櫛』註釈の項冒頭の「ちうさくは、河海抄ぞ第一の物なる」という一節は著名だが、なぜ宣長が『河海抄』を第一と評価したかについては、その理由が判然としていない。本稿においては、その理由を考察するために、「註釈」の項の記述を分析するとともに、『玉の小櫛』中に扱われる註釈書を網羅的に抽出し、各説に対する宣長評の集計を求める手法により、考察を試みる。

一、問題の所在

『河海抄』を語る際、本居宣長『源氏物語玉の小櫛』註釈の項の、次の下りは、枕詞の如く頻用される程著名である。

「ちうさくは、河海抄ぞ第一の物なる、それよりさきにも、これかれあれども、ひろからずくはしからざるを、かの抄は、やまともろこし、儒仏のもろ〳〵の書どもを、ひろく考へいだして、何事もをさ〳〵のこれるくまなく、解（トキ）あきらめられたり。さては花鳥餘情あり。河海の誤れるところをわきまへ、もれたる事どもを考へくはへなど、すべてたよりとなることいとおほし。此二つの抄は、かならず見でかなはぬもの也。但し誤（リ）もいとおほく、語の注などには、殊にひがことのみおほくして、用ひがたし。」（本居宣長全集四、昭四四、筑摩書房）

その主旨は、次のように展開される。

①『河海抄』（四辻善成）が源氏注釈としては、最も優れる。

②その理由は、前代と異なり、和漢儒仏の事柄について、広範かつ隅々まで、考証を施しているからである。

③他に、『河海抄』の誤りを修正・補完した『花鳥餘情』もある。

④『河海抄』『花鳥餘情』二つの抄（注釈）は、必見の価値を持つ。

⑤ただし、『河海抄』『花鳥餘情』語句注を中心に誤りも多い。

宣長は、『河海抄』を第一等と評価し、さらには、『河海抄』の誤りと不足を補った『花鳥餘情』とを併せて、『源氏物語』研究の必須のものと位置づけた。

しかし、この二抄を重視することは、必ずしも宣長独自の見解とは言えない。いわゆる古注と呼ばれる注釈の内、宣長がその分析に最も力を注いだ『源氏物語湖月抄』（引『明星抄』）[1]や、それに先立つ『岷江入楚』等にも、以下の如き記述があるように、『河海抄』『花鳥餘情』両抄を源氏注釈の双璧とする認識は、三条西系堂上注釈者達の伝統的価値観を踏襲したものであった。

○『源氏物語湖月抄』発端、此物語諸抄、『花鳥餘情』の項

〔明〕河海の誤りをただして、義理を演説す。是も猶青表紙には相違の事等有」之。されば青表紙には只奥入一抄の旨を守るのみなり。されども河海花鳥の両説なくばいかでは物語の東西をわきまふべきや尤至宝（シホウ）の抄也。

○『明星抄』一（首巻・桐壺）〈源氏物語古註釈叢刊・四〉、『花鳥餘情』

されは青表紙には（ナシ）只奥入一抄の旨を守のみなり。されとも河海花鳥の両抄なくんばいかでか物かたりの東西を弁へきや（ナシ）、尤至宝の抄也

○『岷江入楚』序

清閑寺のおとゝの河海抄桃花坊の禅閤花鳥余情をもて尤この物かたりの要枢とす

ところが、宣長は、両抄からさらに『河海抄』の方を取り立てて第一等と評価し、「註釈」項の冒頭に据えたのである。その理由については、「和漢儒仏の事柄について、広範かつ隅々まで、考証を施しているということ（やまともろこし、儒仏のもろ〳〵の書どもを、ひろく考へいだして、何事もをさ〳〵のこれるくまなく、解（トキ）あきらめられたり）」としてはいるが、宣長が『河海抄』を入手して、詳細な分析を行ったことは、現在残されている蔵書目録や日記、さらには手沢本『湖月抄』からは跡付けることはできない。内証においても、『河海抄』を、実際に詳細に分析

し得たかということ自体にも疑いが存する程である。[2] つまり、宣長が『河海抄』を手元に置くことなく、「源氏」研究を進めた可能性を捨てきれないのである。

このことを踏まえると、宣長が、『河海抄』を第一等に評価した意図や動機はどこにあるのかという、素朴な疑問が生じる。当然のことながら、当時の常識として、そのような通念がすでにあり、それを踏まえたという推定は十分に成り立つであろう。しかしながら、その証拠が不明である以上、宣長の述作中より、推定を試みる手法が、迂遠かも知れぬが、不可欠となるのである。

二、『紫文要領』から『源氏物語玉の小櫛』へ

宣長が、『河海抄』を第一と挙げた「註釈」の項は、『紫文要領』（宝暦十三年［一七六三］六月七日奥書）から、それを改めた『源氏物語玉の小琴』（大野晋推定によれば、明和五年［一七六八］～安永八年［一七七九］）[3] へと改稿され、さらには『源氏物語玉の小櫛』へと引き継がれたものである。そのため、考察の第一段階として、この三者の「註釈」の項において、叙述・主張がどのように変化したかを分析することが手続きとして必要となろう。そこで、以下、三者の該当部分について、対照表を示し、検討を加える。

表1　註釈の項（前半部）叙述比較表（『紫文要領』『源氏物語玉の小琴』『源氏物語玉の小櫛』）

〔凡例〕文中═══を施した部分は、見せ消ちであることを示す。

	紫文要領（紫）	源氏物語玉の小琴（琴）	源氏物語玉の小櫛（櫛）
①	おほよそこの物語にをきて、河海抄、第一の抄物なり、其のまへにも少々あれ共、広からず、くはしからず、考へのこせることのみ多し、	ちうさくは、河海抄ぞ第一の注釈もなる、それよりさきにもこれかれあれ共、広からず、くはしからざるを、	ちうさくは、河海抄ぞ第一の物なるそれよりさきにもこれかれとあれども、広からず、くはしからざるを、

まず、『河海抄』を『源氏物語』注釈の第一に据える評価は、三者一貫していると言える。冒頭箇所においては、『河海抄』が それ以前の注釈書に比べて、画期的存在であることが述べられるが、文飾上は、『河海抄』以前の注釈が（紫）では「少々」であったのが、「これかれ」の量に変化（増加）している。これは、後の⑥の段に指摘できるように、時間の経過につれて、宣長が目にすることの出来た源氏注釈の種類が増えたことにより、理解が深まったことを反映してのことと思われる。

	紫文要領（紫）	源氏物語玉の小琴（琴）	源氏物語玉の小櫛（櫛）
②	しかるにこの抄は、和漢の儒仏百家の書をひろく考へいたして、事跡・故実・由縁・出処、大かた残るところなく解せられたり、まこ	かの抄は、和漢の儒仏のもろ〳〵の書をひろく考へいたして、何事も、大かた残ることなく解かあらはされたり、	かの抄は、やまともろこし、儒仏のもろ〳〵の書どもを、ひろく考へいたして、何事も、をさ〳〵残れるくまなく解（トキ）あきらめられたり、

とにこの物語につきて至宝といふべし、		

次は、『河海抄』が第一と評されるべき理由を述べている。（紫）では、『河海抄』で和漢の「儒仏百家の書」について考証が行われたとあるが、（琴・櫛）では、「諸子百家」と同義に受け取られかねない「百家」を改めて、「儒仏のもろ〳〵の書」と改められる。また、「事跡・故実・由縁・出処」（紫）を削除したのは、同類語の重出を避け、表現の洗練を図っていることによるものだろう。また、宣長は『河海抄』の考証の程度についての記述においては、「大かた残ることなく」（紫・琴）から「残れるくまなく」（櫛）へと変化しており、『河海抄』の考証方法が徹底したものであることを、より強調した表現になっていることが注目される。この表現の変化の一事を取り上げてみても、宣長の『河海抄』宣揚の意図は、より強固になっていることがわかる。

	紫文要領（紫）	源氏物語玉の小琴（琴）	源氏物語玉の小櫛（櫛）
③	其後花鳥餘情有、河海の誤れるところを弁し、もれたる所を考へくはへ、其外後世学者のために便となること多し、	さては花鳥餘情有、河海の誤れるところを弁し、もれたるところを考へくはへなと、其外便となることいと多し、	さては花鳥餘情あり、河海の誤れるところをわきまへ、もれたる事どもを考へくはへなと、すべてたよりとなることいとおほし、

③では、「便りとなること多し」（紫）→「便りとなることいと多し」（琴・櫛）と、『花鳥餘情』に対する評価がより強調されていることが目に付く。

	紫文要領（紫）	源氏物語玉の小琴（琴）	源氏物語玉の小櫛（櫛）
④	右両抄は、必ず見ではかなはぬ物也、大方源氏は、此二抄にて大抵解しかたき事は解する也、二抄にておほつかなき事は、後々の抄にても明らかならす、	此二の抄は、かならす見ではかなはぬ物也、	此二つの抄は、かならず見ではかなはぬもの也、

④では、「大方源氏はこの二抄にて大抵解しがたきことは解する也、二抄にておほつかなき事は、後々の抄にても明らかならず」（紫）というような、『河海抄』『花鳥餘情』を称揚する表現が大幅に削除されていることが目立つ。これは、従来の伝統的表現に根ざした、二抄重視の姿勢がやや控えめになったものとも言えるが、次項の二抄の瑕疵についての記述との整合性を図るためと考えることもできる。

	紫文要領（紫）	源氏物語玉の小琴（琴）	源氏物語玉の小櫛（櫛）
⑤	たゝし巻々の中にをきて只なにとなき所に、註し誤りたる事がおほき也、故に一段〳〵の詞のこまやかなる事の註におきては、右二抄用ひかたき事多し。	たゝし誤も又いと多く、又語の注なとには、殊にひか事多くして、用ひかたし、	たゝし誤りもいとおほく、語の注などには、殊にひがことのみおほくして、用ひがたし、

⑤は、「巻々の中にをきてただ何となきところ」「一段一段の詞のこまやかなることの注」（紫）という、二抄の誤りのある具体的箇所を「語の注」（琴・櫛）と、簡潔かつ明確な表現にあらためることにより、文章をより洗練させる一方で、『河海抄』『花鳥餘情』の二抄のことを、「ひがことのみおほく」（琴・櫛）と、より強調された表現に改めて、難じている。

	紫文要領（紫）	源氏物語玉の小琴（琴）	源氏物語玉の小櫛（櫛）
⑥	此後細流有、右二抄の誤ある所をたゝし、かれこれ考へられたり、此外、哢花抄、明星抄、孟津抄、岷江入楚なといふ有、又源氏物語抄といふ物も有、其外もかれこれ抄物多し、みなかくへちの事はなし、少しつゝかはりたる迄也、	其後哢花、細流有、右の二抄の誤をたゝし、かれこれと考へ加へられたり、さては、明星抄、孟津抄、岷江入楚、万水一露なとなほくさ〳〵頭書や何やと多かり、みなさしもことなる事はなし、たゝ少しつゝかはりたるのみ也、	其後哢花細流あり、河海花鳥の誤りをたゞし、かれこれと考へくはられたり、さては、又明星抄孟津抄岷江入楚万水一露湖月抄などなほくさ〳〵頭書や何やと多かり、みなさきゞの抄どもを引出て、さしもことなることなく、たゞすこしづゝ変りたるのみ也、

⑥においては、『河海抄』『花鳥餘情』の二抄の後の源氏注釈の細目に変化がある。

まず、「此後細流有」（紫）→「哢花細流」（琴・櫛）と、「哢花抄」の配列補正が施された他、（琴・櫛）段階では、『万水一露』『頭書源氏物語』が新たに加わるとともに、「源氏物語抄といふ物」（紫）が削除される。これは、特に（櫛）執筆に至る過程において、宣長が実際に検証を行った際、その典籍名に責任を帰趨可能な典籍（必ずしも直接

の検証を意味せず、孫引きによる検証も含む）のみに、その挙例を限定する配慮が働いたことによろう。

また、この項目における『湖月抄』評の変化は、顕著である。「河海」・「花鳥」以後の、「少しつゝ」変り、さしたる変化もない注釈の範疇に、（櫛）段階で「湖月」が加えられたことは、注目に値する。

『源氏物語玉の小櫛』は、『湖月抄』の批判を骨子としている。宣長が『湖月抄』を購求したのは、宝暦七年（一七五七）二十八歳時のこと。[4]『紫文要領』脱稿が宝暦十三年三十四の時から、寛政八年（一七九六）の六十七歳時の『玉の小櫛』起稿～寛政十一年の刊行の間に、『湖月抄』を他の注釈書と同列に扱い、「みな格別のことなく、少しずつかわっただけだ」という断定が下せるだけの自信が生まれ、この部分の文に反映しているのであろう。

このことは、次の⑦⑧における『湖月抄』評の変化にも関連する。『紫文要領』の段階では、宣長は、『湖月抄』が地下の人の作である故に、源氏注釈としての価値がないとの批判があることに対し、『湖月抄』における季吟の独自の説（今案）は、「十か一二にして、餘はみな古来先達の抄」により構成されていると反論する。それ故、『湖月抄』を否定することは、批判側である堂上の説をもないがしろにするも同然だと論破しているのである。『紫文要領』においては、「まつ大抵湖月はよき物」と弁護されている。しかし、それは、宣長にとって、「普通の歌学につきていふ」ことのできるもので、物語論においては、つまり、源氏の読みの革新を求めるためには、さらに「湖月」を乗り越えるための論理が必要となる。そのためにも、宣長は、『玉の小櫛』においては、⑧に見えるような「湖月」の弁護は行わず、別に「湖月抄の事」という一項目を立て、

さておのれ今小櫛を物するにも、世にあまねく見る本なるゆゑに、たよりよからむために、何事も、此湖月抄につきていふことおほし、巻々の、そのひらひらとしるすたぐひなり、

と、『玉の小櫛』全体を、「難湖月抄」的性格に変貌させているのであった。

	紫文要領（紫）	源氏物語玉の小琴（琴）	源氏物語玉の小櫛（櫛）
⑦	湖月抄といふ物は、季吟法印の作也、これは先々の抄共をあはせてよき程に引出し、本文をのこらすあけて、頭書と旁註とに諸抄をあけ、まゝ師説今案なともましへたり、故に初心はもとより、見る人の大に簡便なる抄也、よりて此抄出来て後は、諸抄共に大抵そなはりたる物ゆへ、人ことにこれを見るほとに、今は世間一同に此抄を用ゆる也、	湖月抄といふ物は、れゐ先々の抄共をあはせてよき程に引出し、本文をもみなあけて、頭書と旁註とに諸抄をあけ、まゝ師説今案なとをもましへたり、見る人のいとたよりよき抄也、さる故に世中源氏物語といへは大かたあまねく此抄を用る事となれり、	其中に、今世中にあまねく用ふるは湖月抄也、げに此抄は、さきぐのもろ〳〵の抄どもを、あまねくよきほどに、頭と旁とに引出、師説今按をもまじへ、すべて見るにたよりよきさまにぞ書なしたる、
⑧	これにつきて、湖月は地下の人の作にて、一向用ゆるにたらぬ物也、さらに物語の本義にかなはす、といふ人あり、これは心得ぬ事也、まつ地下は用ひぬといふ事、もとよりいふにたらぬ愚昧の事なれ共、しゐてさいははそれにしても、此抄もし季吟の今案計ならはこそさもあるへけれ、今案は十か一二にして、餘はみな古来先達の抄をひきて、みな堂上の御説、もとより此道の先達の説也、	〔記述なし〕	〔記述なし〕

それをわきまへす、一向に用ひすといはは、先達の説を用ひぬ也、それも先達の説共をはなれて、各別の見解あらは、それは論のかきりにあらす、まつ大抵湖月はよき物也、初心の人も大抵の学者も、見てあやまりなかるへし、たゝし是は、世間普通の歌学につきていふ也、もし深く此道を執し、古義を尋ね、歌道の真の味を覚え、物語の真実の意を見んとする時は、諸抄共に用ひかたき事多けれは、此抄もとよりたのむにたらす、別に一隻眼して見るへし、

以上、『紫文要領』から『玉の小櫛』への改稿を分析する中で、『河海抄』が第一との認識が、一貫したものであったということと、『湖月抄』への評価が低下したことが明確になった。これらのことは、宣長の源氏注釈学においても大きな意味を持つと言えよう。しかし、『河海抄』がなぜ一等に据えられたかについては、①②にて述べられた如く、幅広い目配りによる考証態度としか答えは求められない。

ただし、『玉の小櫛』段階で宣長が頻用した契沖の『源註拾遺』には、

一　此物語抄物の大部なるは河海その初歟。然るに暗記の違へる歟、草案歟、日本紀万葉等にありとてひかれたる事の本書になき事すくなからす。

という文が、開巻に据えられている。宣長が『宝暦二年以後購求謄写書籍附書目』に記す所によれば、同書は明和二年（一七六五）の謄写にかかり、『紫文要領』脱稿の宝暦十三年（一七六三）から二年後のことにあたる。時期が近接しているということは、『紫文要領』執筆時にも部分的に『源註拾遺』に触れる機会があったとの推定も可能であろう。もっとも、この部分の、契沖の評価は「大部なるものの初め」という部分のみが積極的要素を持つに過ぎないため、

それがさらに誇張されて、宣長自身の評価に反映したとは、現段階では断言できない。

しかし、現時点では、『河海抄』を称揚する見解が他に見当たらない以上、これ以上の推測は不可能となる。

そこで、今度は視点を変え、宣長源氏学の帰結点とも言える『玉の小櫛』に引用された源氏注釈に関する記述について分析を試みることとする。

三、『源氏物語玉の小櫛』に見える源氏注釈

『源氏物語玉の小櫛』引かれる源氏注釈書は、以下の出現頻度順で現れる。これらの内、＊印を付したものは、『湖月抄』中の説をさしたものと思われるが、その他の固有名を持つものについても、『湖月抄』からの孫引きが混在していると推測される。

同様の調査については、すでに杉田昌彦[5]に、宣長手沢本『湖月抄』の調査があり、その統計数が報告されているが、本調査においては、第一の目的を『河海抄』に対する判断に置いているため、文章の係り具合でそれと推定されるものについても、件数に含めているため、必ずしも件数は一致しない。別に、索引を兼ねて、抽出された注釈書一覧を付したので、参照の助けとしていただきたい。

表2『源氏物語玉の小櫛』中の源氏注釈（出現頻度順）

書名	出現数
〔合計〕	1074
＊注	254
源注拾遺	197
湖月抄	90
細流抄	82
河海抄	81
花鳥餘情	60
＊傍注	52
雨夜物語だみ詞	40
＊諸抄	30
＊或抄	25
＊注ども	25
弄花抄	24
注釈ども	12
湖月師説	11
孟津抄	11
湖月本	9
紫家七論	9
源氏外伝	8
細流など諸抄	6
＊宗祇注	6
万水一露	5
＊抄	5
＊ふるき抄ども	2
＊ふるき注ども	2
＊或説	2
稲掛〈ノ〉大平	2
＊説	2
くさぐさの説	1
ちかき諸抄（青表紙本文と）	1
はやくの注釈ども	1
＊或注	1
＊一条禅閤の年立	1

玉勝間	1
源氏物語新釈	1
湖月抄（或説）	1
湖月抄一説	1
＊後の抄ども	1
＊後の抄ども（河海抄以後）	1
＊後の抄ども（花鳥餘情以後）	1
＊宗祇	1
＊宗祇抄	1

＊諸抄（河海抄其外の抄）	1
＊諸説	1
＊水源抄	1
＊注或説	1
長谷川〈ノ〉常雄	1
明星抄	1
岷江入楚	1
＊箋	1

次に、上記に引用された注釈諸書に記される各説ついて、宣長がどのような検討結果を記したかを分析してみた。抽出に際しては、『源氏物語玉の小櫛』（大野晋・編『本居宣長全集』第四巻、昭和四四年十月、筑摩書房）を使用し、抽出された各説について、以下の判定基準にて分別を施した。

○（賛成）
△（部分的賛成）
△△（部分的否定）
□（判断保留＝賛成とも否定とも明確な判断を示していないもの）
×（否定）

【判断例】

○（賛成）

河海にも、一部のうち、紫ノ上の事を、すぐれてかきなしたる故に、藤式部を改めて、紫式部と号せられたりとあり、今思ふに、紫ノ上の事を、すぐれて書ける故といふは、さも有るべし、（一の巻・紫式部が事、一七五頁）

△（否定）

つながぬ舟の（十三のひら同）河海に、文選を引れたるは、本也、然れどもこゝは、白氏文集の偶吟ノ詩に、無レ情水任レ方円器ニ、不レ繫舟随レ去住風ニ、といへるを書る也、さてげにあやなしは、此本文にかゝりていへり、（五の巻・帚木巻上、三四九頁）

△△（部分的否定）

言の本の意は、拾遺の説の如くなるべし、然れども物語につかひたる意は、側々しき也、（五の巻・桐壺・三三〇頁）

□（判断保留）

……（前略）……さて又河海抄其外の抄にも、引歌未勘としるされて、いかなる歌の詞ともしられぬも、をり（をり）あるは、猶よくかむかへて、引出まほしきわざなり、（一の巻・引歌といふものの事、一八二頁）

×（否定）

此事は、契仲もいへるごとく、たゞそらにうかべ給へるが、たがへるなどを、そのまゝに、ゆ

くりなくしるされたるものぞおぼゆる、然るを後の抄どもにも、その考へなく、たゞ河海のまゝにとられたる、それも又みだりなるわざなり、すべてその心して見べし、（一の巻・引歌といふものの事、一八二頁）

その結果、宣長により否定された各説の集計処理を試みたものを表3に示した。

この分類・判定を施すに際しては、どうしても判断の恣意性を免れ得ない。そこで、これらの判断をなるべく客観的なものにするためには、上記の判断を否定かそれ以外かに分別し、それを集計化することを試みた。なお、参考までに、別に一覧を付載したので参看せられたい。

表3　『源氏物語玉の小櫛』中にて、説を否定された件数（否定率の少ないもの順）

所引注釈書名	否定数	%
抄	1	20・0
或抄	7	28・0
源注拾遺	77	39・1
河海抄	50	61・7
湖月師説	11	64・1
花鳥餘情	39	65・0
細流など諸抄	4	66・7
紫家七論	6	66・7
孟津抄	8	72・7
弄花抄	17	73・9
雨夜物語だみ詞	31	77・5
細流抄	66	80・5
諸抄	26	86・7
源氏外伝	7	87・5
注釈ども	11	91・7
傍注	48	92・3
注	241	94・8

くさぐさの説	1	100・0
ちかき諸抄（青表紙本文と）	1	100・0
はやくの注釈ども	1	100・0
或注	1	100・0
湖月抄一説	1	100・0
後の抄ども	1	100・0
後の抄ども（河海抄以後）	1	100・0
諸抄（河海抄其外の抄）	1	100・0
諸説	1	100・0
注（含河海抄）	1	100・0

注（湖月抄&?）	1	100・0
注（湖月抄のこと）	1	100・0
注或説	1	100・0
箋	1	100・0
ふるき抄ども	2	100・0
ふるき注ども	2	100・0
或説	2	100・0
説	2	100・0
宗祇注（抄）	8	100・0
注ども	24	100・0

その他（否定数0のもの。出現数は表2参照。）

一条禅閤の年立・稲掛ノ大平・玉勝間・後の抄ども（花鳥餘情以後）・水源抄・長谷川ノ常雄・万水一露・明星抄・弄花抄・岷江入楚

上記結果から考えるに、**ゴチック文字**で示したような、出現数の多い、まとまった注釈書類の中では、**『源注拾遺』**『河海抄』が順に上位二つに位置していることが分かる。

『源注拾遺』については、冒頭で引用した『源氏物語玉の小櫛』「註釈」の項にて、

さて又契沖ほうしの源註拾遺といふ物八巻あり、ことぐく注せるにはあらで、ただ諸抄にもれたる事、誤れる

事どもを、こゝかしこ、わきまへ解（トキ）たる物也、此人は、よにことなるさとり有し人なれば、めずらしきこと多し、すべてこの人のあらはせる書どもは、近き世のうきたる説をば、さらにとらで、何事も、古き書を證（アカシ）として、新に見明らめたることおほき也、

とある如く、当時注目されることの少なかった契沖の言説に対し、肯定的な評が下されている。

これらの集計結果が、宣長の源氏注釈書観、すなわち、『玉の小櫛』注釈の項冒頭表現について、どれだけの心証的反映を示したものであったかは明確ではない。しかし、『河海抄』が、六割近い否定的見解を得ながらも、他書に比べて相対的に高い評価を得ていることが統計的に一つの結果として提示できた意義は大きいように思う。

しかし、本稿における調査においては、宣長が『河海抄』をどれだけ詳細に分析して「第一」との判断を下したかについては、その結論を保留したい。というのは、冒頭でも述べた如く、宣長が『河海抄』を実見して精細に分析したかどうかという問題が、上記調査では今なお未解決のまま残されるからである。それについては、後考を期したい。

表4『源氏物語玉の小櫛』に引用される注釈書一覧兼索引

【凡例】

以下は、『源氏物語玉の小櫛』に引かれ、検討・批評を加えられた源氏注釈書の一覧に、巻・部・見出し〈湖月抄の丁付〉・『本居宣長全集』第四巻における頁行・説の判定等を加えて索引機能を持たせたものである。配列は、あいうえお順に従った。

■或抄■

◇五・桐壺巻▼あぢきなう〈三〉318・6○▼もろともにはぐゝまぬおぼつかなさを〈十二〉322・19×

▼夜いたうふけぬれば〈十四〉324・2○▼あさがれひ〈十九〉326・14×▼あやしくよそへ聞えつべき〈廿四〉329・16○

◇六・帚木巻下▼えたもつまじく〈廿七〉360・10×▼うたがこそふべければ〈廿七〉361・6○▼ねたう〈句〉心とゞめても云々〈卅八〉366・19○

◇六・空蝉巻▼うへにやさふらひ給ひつる〈九〉373・1○

◇六・夕顔巻▼つきしろひめくはす〈五〉374・7○▼さるべきにこそは〈十七〉377・14○▼かしこくもとめ〈卅五〉380・11○▼うちかはし給へりしが云々〈四十〉381・17×

◇七・蓬生巻▼のたまひすべして〈廿二〉420・2○

◇九・宇治・はし姫巻▼わが御時〈九〉477・11○▼〈歌〉命あらば云々〈四十三〉479・13×

◇九・宇治・あげまきの巻▼もののつみめきたる〈八十二〉487・10○

◇九・宇治・宿木巻▼やがてあとたえなましよりは〈十〉491・4×▼むねはおさへたる云々〈五十八〉492・19○▼たいふがもとより〈七十一〉494・1○

◇九・宇治・東屋巻▼きよらににあひたり〈廿三〉497・1○

◇九・宇治・浮舟巻▼おろかなるにやは〈四十四〉506・2○

◇九・宇治・かげろふの巻▼くはしくはきかせ奉らぬにや〈四十六〉512・7○▼くはしくはきかせ奉らぬにや〈四十六〉513・7×▼此御ゆかりには〈五十五〉515・4×▼此御ゆかりには〈五十五〉515・4○

■或説■

◇三・巻々のとし立▼竹川巻267・11×▼紅梅巻269・5×

■或注■

◇六・帚木巻下▼かたき世ぞとは云々〈廿一〉３５７・５×

■一条禅閤の年立■

◇三・巻々のとし立▼あふひの巻２５５・１４○

■稲掛〈ノ〉大平■

◇七・葵巻▼〈歌〉今も見て云々〈卅五〉４０３・１６○

◇八・下〈ノ〉若菜巻▼げにあながちに思ふ人のためには云々〈八十七〉４５７・７○

■雨夜物語だみ詞■

◇五・帚木巻上▼おほいとのにはおぼつかなく〈三〉３３４・１２×▼右のおとゞのいたはりかしづき給ふすみかは〈三〉３３４・１６×▼ひとつゆゑづけて〈五〉３３７・３×▼ひとつゆゑづけて〈五〉３３７・４×▼ほゝゑみて〈五〉３３７・１１×▼ほゝゑみて〈五〉３３７・１１○▼やむことなき〈六〉３３８・５×▼なま（なま）のかんだちめ〈七〉３３８・１４×▼すてがたこものをばとて〈八〉３４１・２×▼されど何か〈十〉３４２・１１×▼ところせく思ひたまへぬだに〈十〉３４２・１４○▼こめきて〈十〉３４５・１５○▼そば（そば）しく〈十〉３４６・１７○▼よろこびに思ひ〈十二〉３４７・１７○▼見そめし心ざしいとほしく思はば〈十四〉３４９・５×▼たぢろきに〈十四〉３４９・９○▼たのもしげなきうたがひ〈十四〉３５０・１×▼たのもしげなきうたがひ〈十四〉３５０・２×▼たのもしげなきうたがひ〈十四〉３５０・２×▼ひゞらきゐたり〈十四〉３５０・１２×▼うるはしき人のてうどの〈十五〉３５０・１８×▼すくよかならぬ山のけしき〈十六〉３５１・９×

◇六・帚木巻下▼のりのしの〈十七〉３５３・３×▼まほ〈十七〉３５３・４×▼さがなさも云々〈十八〉３５３・１４×▼まことにうしなども思ひて〈十八〉３５４・３×▼ちぎりふかくとも〈十八〉３５４・５○▼あいなだのみ〈十九〉３５４・１２×▼つなびきて〈廿一〉３５６・５○▼はかなき花もみぢといふも云々〈廿一〉３５６・１８×▼かたき世ぞとは云々〈廿一〉３５７・４×▼まかりかよひし〈廿一〉３５７・１４×▼すこしまばゆく〈廿二〉３５８・１×▼ことなる事もなかりきや〈同〉３５９・１６×▼されば かのさがなものも云々わびしかりぬべけれ〈廿七〉３６０・１３○▼さいし〈廿九〉３６２・１×▼おひて〈卅〉３６２・１７×▼あはめ〈卅一〉３６３・３×▼ものしき事なれ〈卅二〉３６３・１６×

■河海抄■

◇一・此源氏の物語の作りぬし▼１７４・１２×

◇一・紫式部が事▼１７５・１５×▼１７６・２○

◇一・作れる時世▼１７７・９○

◇一・註釈▼１８０・１３○▼１８０・１６×▼１８０・１６○▼１８０・１７×

◇一・引歌といふものの事▼１８２・３○▼１８２・４×▼１８２・８×

◇二・なほおほむね▼心にのみこめて、無言太子とか、ほうしばらの、かなしき事にする、むかしのたとひのやうに、あしきことよきことを、おもひしりながら、うづもれなんも、いふかひなし、２１１・７○▼胡蝶〈ノ巻〈二〉云、恋の山には、くじのたふれ云々、２１６・１０○

◇五・桐壷巻▼花やかなる〈三〉３１８・１１×▼わりなく〈四〉３１９・７×▼まみなどもいとたゆげにて〈七〉３２０・１５×▼御使のゆきかふ〈七〉３２１・１１×▼すげなふ〈九〉３２２・１×▼うしろめたう

〈十五〉 324・14×▼いとおしたちかど（かど）しき〈十八〉 326・8×▼三代（ミヨ）のみやづかへに〈廿二〉 328・14○▼うけばりて〈廿五〉 328・17×▼こよなく〈廿五〉 329・9×▼なづさひ〈廿五〉 329・12○▼みづら〈廿七〉 331・4×

◇五・帚木巻上▼いとゞかゝるすきごとどもを333・17×▼御物忌〈二〉 334・7×▼へむつれ聞え〈三〉 335・6×▼かたは〈三〉 335・10×▼おのがじゝ〈四〉 335・12×▼あはつかに〈十〉 345・12○▼ふるごたち〈十三〉 348・13×▼つながぬ舟の〈十四〉 349・18×▼さればみたるも〈十五〉 350・14×▼すみがき〈十五〉 351・5○▼すくよかならぬ山のけしき〈十六〉 351・9×

◇六・帚木巻下▼ひたやごもりに〈廿〉 355・12○▼あはめ〈卅一〉 363・3○▼ほゝゆがめて〈卅六〉 365・18×▼見なほし給ふのちせもやとも云々〈四十二〉 367・19□▼こととあかくなれば〈四十三〉 368・14○▼世のたとひにて〈四十四〉 369・10△

◇六・空蝉巻▼〈歌〉うつせみの云々〈九〉 373・7×

◇六・夕顔巻▼けいめい〈廿三〉 378・18×▼べちなう〈廿三〉 379・7○

◇六・若紫巻▼なさけなき人になりゆかば〈七〉 386・8×▼〈歌〉おく山の云々〈廿〉 389・18×▼すきたる袋〈十九〉 390・4×▼こんるりのつぼどもに〈廿〉 390・5×▼同じ人にや〈卅四〉 392・13×

◇七・葵巻▼ゆすりみちて〈廿五〉 403・8○

◇七・須磨巻▼こしのべて〈五〉 409・4×▼いけるよにとは〈卅二〉 411・17×▼つくりゑを云々〈卅四〉 411・19○

◇七・明石巻▼いひしにたがふ〈十四〉４１５・５×
◇七・みをつくしの巻▼御はかし云々〈十一〉４１７・１４×
◇七・蓬生巻▼のたまひすべして〈廿二〉４２０・２○▼丁こぼちたる〈廿三〉４２０・５○
◇七・をとめの巻▼風のちからけだしすくなし〈十九〉４２９・１×▼うへの五節〈卅六〉４２９・１３○
◇七・玉かづらの巻▼いたゞきをはなれたる光〈廿六〉４３２・２×
◇八・真木柱巻▼むかしのなにがしがためしも〈卅二〉４４４・１２×
◇八・上〈ノ〉若菜巻▼おいらかにおほしたて〈四十八〉４５０・１７×▼ふくちの園に云々〈九十三〉４５２・１８○
◇八・下〈ノ〉若菜巻▼青にびのおもておりて〈廿〉４５４・１４○
◇八・夕霧巻▼たが名かをしき〈七十五〉４６６・１×
◇八・まぼろしの巻▼へいまゝでへにける〈廿〉４６８・３×
◇八・にほふ宮巻▼ぜんげうたいしの〈七〉４６９・１２×
◇八・紅梅巻▼さかしきひじりの〈十〉４７０・１１×
◇八・竹川巻▼むかしの例〈卅六〉４７５・１２×
◇九・宇治・はし姫巻▼扇ならでこれしても月はまねきつべかけり〈廿〉４７８・９○
◇九・宇治・あげまきの巻▼みやうがうの糸〈二〉４８２・１４×
◇九・宇治・早蕨巻▼いはせもりの云々〈六〉４８８・１３○▼屋どをばかれじと〈十〉４８８・１５×▼〈歌〉しなてるや云々〈十七〉４９０・５×

◇九・宇治・宿木巻▼かぎりだにあるなど〈六十〉493・3○▼たくみもゑしも〈六十〉493・10○
◇九・宇治・浮舟巻▼じやうぐわん〈五十三〉507・19○▼ぶだうのものども〈六十〉508・8○
◇九・宇治・夢浮橋巻▼（総論）520・18×▼こと（ごと）には〈十四〉522・16○

■花鳥餘情■

◇一・此源氏の物語の作りぬし▼174・11×
◇一・註釈▼180・15○▼180・15□▼180・16×▼180・16○▼180・17×
◇一・引歌といふものの事▼182・3○
◇二・なほおほむね▼うつほの藤原〈ノ〉君のむすめこそ、いとおもりかに、はか（ばか）しき人にて、あやまちなかめれど、すくよかに、いひ出たるしわざ、さも女しきところなか〈ン〉めるぞ、とひやうなめるとのたまへば、208・15○
◇三・巻々のとし立▼桐壷巻254・3×▼竹川巻266・7×▼宿木巻〈宇治五〉272・1△▼宿木巻〈宇治五〉272・2△▼宿木巻〈宇治五〉272・9×▼匂宮巻より下花鳥の年立いたくみだれ誤れる事273・3×▼匂宮巻より下花鳥の年立いたくみだれ誤れる事273・12×▼匂宮巻より下花鳥の年立いたくみだれ誤れる事274・11×▼匂宮巻より下花鳥の年立いたくみだれ誤れる事274・15×
◇五・桐壷巻▼玉のをのこみこ〈三〉318・17×▼やがてさふらはせ給ひ〈四〉319・9×▼〈御歌〉宮城野の云々〈十二〉323・8×▼〈歌〉いとゞしく云々雲のうへ人〈十五〉324・7×▼国のおやとなりて云々327・19○▼大蔵卿くら人つかうまつる〈廿六〉331・5×▼御やすみどころにまかで給ひて云々〈廿七〉331・9○

◇五・帚木巻上▼をさ（をさ）たちおくれず〈三〉３３５・４×▼そこにこそ〈四〉３３６・３×▼なま（なま）のかんだちめ〈七〉３３８・１４×▼なま（なま）のかんだちめ〈七〉３３８・１４○▼世にありと人にしられず云々〈八〉３４０・１５×▼かみは下にたすけられ〈九〉３４１・１０○▼こめきて〈十〉３４５・１５○▼しなにもよらじ〈十〉３４７・６×▼うるはしき人のてうどの〈十五〉３５０・１８×

◇六・帚木巻下▼伊予〈ノ〉介〈卅六〉３６６・９×▼見なほし給ふのちせもやとも云々〈四十二〉３６７・１９×

◇六・空蟬巻▼なほ（なほ）しく〈九〉３７２・１２×

◇六・夕顔巻▼ゆげたはいくつと云々〈十〉３７５・１５×▼されたるくれ竹〈十九〉３７８・１○▼わかれといふものの云々〈卅九〉３８１・８×▼とあるもかゝるも云々〈卅九〉３８１・１２×▼けいめいし給て〈四十二〉３８２・４×

◇六・若紫巻▼かいりうわうのきさき〈六〉３８６・４×▼〈歌〉さしぐみに云々〈十八〉３８９・１１○

◇七・末摘花巻▼たゝうめの花の〈卅二〉３９９・１１○

◇七・葵巻▼ひとだまひ〈七〉４０２・１４×

◇七・榊巻▼又此わたりに云々〈廿〉４０６・２×

◇七・須磨巻▼こしのべて〈五〉４０９・４○

◇七・明石巻▼空のみだれ４１４・２×

◇七・絵合巻▼かみ絵〈十四〉４２１・１２×

◇七・玉かづらの巻▼いたゞきをはなれたる光〈廿六〉４３２・３×

◇八・藤末裏葉巻▼としへにける此家の〈九〉447・17○▼むかしの例をあらためて云々〈廿〉449・7×

◇八・にほふ宮巻▼ぜんげうたいしの〈七〉469・12×

◇九・宇治・あげまきの巻▼みやうがうの糸〈二〉482・14×▼さやうにおもむけて云々〈七〉483・7×▼すてがたくおとしおき〈卅〉484・9○

◇九・宇治・早蕨巻▼いはせもりの云々〈六〉488・12○

◇九・宇治・宿木巻▼我こそさきになど〈四十九〉492・4×▼めづらかなる事なめれば〈五十四〉492・11×

◇九・宇治・手習巻▼うつし人になりて云々〈六十九〉520・9○

◇九・宇治・夢浮橋巻▼雲のはるかに云々〈廿〉522・4○

■くさぐさの説■

◇一・此源氏の物語の作りぬし▼174・14×

■源氏外伝■

◇一・註釈▼181・12×

◇二・なほおほむね▼226・19×▼227・2×▼227・3×▼227・10○▼227・11×▼228・9×▼228・11×

■源氏物語新釈■

◇一・註釈▼181・10△

■源注拾遺■

◇一・註釈▼181・3○

◇一・引歌といふものの事▼182・6○

◇五・桐壺巻▼あつしく〈二〉317・11×▼まばゆき〈三〉318・2○▼此御にほひには〈四〉319・4○▼およすげ〈六〉320・3○▼まみなどもいとたゆげにて〈六〉320・13○▼〈歌〉いかまほしきは〈七〉321・5△▼すげなふ〈九〉322・1○▼はた寒き〈十〉322・6×▼〈御歌〉宮城野の云々〈十二〉323・8×▼さう（ざう）しく〈十五〉324・11○▼うしろめたう〈十五〉324・14○▼いとおしたちかど（かど）しき〈十八〉326・8○▼国のおやとなりて云々327・19×▼きはことに〈廿三〉328・11×▼うけばりて〈廿五〉328・18×▼そば（そば）しき〈廿六〉330・15△▼みづら〈廿七〉331・4○

◇五・帚木巻上▼いとゞかゝるすきごとどもを333・17○▼御物忌〈二〉334・7○▼をさ（をさ）たちおくれず〈三〉335・1○▼へむつれ聞え〈三〉335・6○▼へむつれ聞え〈三〉335・6×▼かたは〈三〉335・10×▼そこにこそ〈四〉336・3○▼たゞうはべばかりのなさけに〈句〉てはしりかき〈四〉336・6×▼びさうなき〈十〉344・8×▼なほくるしかるらん〈十〉346・16○▼よろこびに思ひ〈十二〉347・17○▼ふるごたち〈十三〉348・13○▼たのもしげなきうたがひ〈十四〉350・3○

◇六・帚木巻下▼および〈十九〉354・14○▼つきなきいとなみにあはせ〈卅二〉364・3○▼やをら〈卅五〉365・13○▼ほゝゆがめて〈卅六〉365・18×▼かしこげにと聞ゆ〈五十〉371・5×

◇六・空蟬巻▼はうそくなる〈四〉371・12×▼たゝみひろげてふす〈七〉372・7×▼ぬぎすべしたり

と見ゆるうすぎぬを〈十〉３７２・１５×▼〈歌〉うつせみの云々〈九〉３７３・５□
◇六・夕顔巻▼御心ざしのところ〈七〉３７５・３×▼わがかなしと思ふむすめを〈十二〉３７６・１１×▼右近の君こそ〈十三〉３７６・１６○▼其車をぞ見まし〈十四〉３７７・３△▼何心もなく云々〈廿六〉３８０・１×▼われかのけしき〈廿七〉３８０・５○▼つゝみのほど〈四十〉３８１・１９○▼はふれぬべきにや〈四十〉３８２・１○▼あゑ（ママ）に〈四十六〉３８３・１×▼いとしも人に〈四十六〉３８３・３○
◇六・若紫巻▼心をやれるすまひ〈五〉３８５・１６×▼あさはか〈十七〉３８９・２○▼おとな（おとな）しう云々〈十七〉３８９・４×▼〈歌〉さしぐみに云々〈十八〉３８９・８○▼〈歌〉おく山の云々〈廿〉３８９・１８×▼すきたる袋〈十九〉３９０・４○▼とはぬはつらき〈廿四〉３９０・１５○▼〈歌〉おもかげは云々〈廿五〉３９１・２○▼同じ人にや〈卅四〉３９２・１３○▼ひきさげて〈四十七〉３９５・４○
◇七・末摘花巻▼父君のもとを〈三〉３９８・５×▼わざとびははひけど〈九〉３９８・８△▼えかたのやうにも云々〈廿〉３９８・１９○
◇七・紅葉賀巻▼心なげにいはけて〈廿〉４００・１５○
◇七・葵巻▼ゆすりみちて〈廿五〉４０３・８○▼かつそこなはれ〈廿六〉４０３・１１○▼めをおししぼりつゝ〈四十一〉４０４・７×▼〈春や来ぬるとも云々〈五十二〉４０４・１７○
◇七・榊巻▼とのゐものの袋〈十六〉４０５・１３○▼〈歌〉あふことの云々〈廿五〉４０６・１４○▼〈歌〉あふことの云々〈廿五〉４０６・１８△△▼〈霞も人の〈卅七〉４０７・１１○
◇七・須磨巻▼ひたゝけたらん〈二〉４０９・２○▼いへばえに〈六〉４０９・１１○▼涙をひとめうけて〈十二〉４０９・１７○▼〈歌〉ふる里を云々〈廿三〉４１１・１○▼〈歌〉浦にたく云々〈廿七〉４１１・１３×

▼いかでかはうちぐしては云々〈四十〉 412・11△▼くらかなにぞなる〈四十六〉 413・8×▼〈歌〉たづがなき云々〈四十八〉 413・9○

◇七・明石巻▼雨のあししめり〈六〉 414・7○▼〈歌〉あはと見る云々〈十六〉 415・7○▼〈歌〉あはと見る云々〈十六〉 415・12×▼げに物思ひしらん人にこそ〈卅一〉 416・10○▼〈歌〉なげきつゝ云々〈四十六〉 417・6○

◇七・みをつくしの巻▼〈歌〉うちつけの〈十〉 417・13○

◇七・絵合巻▼同じき心葉の〈十五〉 421・13×▼おれもの〈廿〉 422・8×

◇七・松風巻▼つなし〈四〉 422・12×▼天にうまるゝ人の云々〈十〉 422・16○▼水の音なひかごとがましう聞ゆ〈十六〉 423・7○

◇七・薄雲巻▼たすきひきゆひ〈十〉 425・11○▼たゞよのつねのおぼえに云々〈十三〉 425・17×▼思ふことしてしがなと〈卅五〉 426・7○▼思ふことしてしがなと〈卅五〉 426・8×

◇七・朝顔巻▼みそぎを神は〈六〉 426・17×▼うすゝぎいできて〈十二〉 427・10×▼松と竹との云々〈十九〉 427・19×

◇七・玉かづらの巻▼ひゞきのなだ〈十四〉 431・5□▼〈歌〉うきことに云々〈十四〉 431・6○▼此君とのたまへば〈卅二〉 432・6×▼おやめきてのたまふ〈卅二〉 432・8×▼をむなになるまで〈卅七〉 432・13×

◇七・蛍巻▼うすきかたに〈六〉 433・17○

◇七・とこなつの巻▼〈歌〉草わかみ云々〈廿五〉 436・18○▼大川水の〈廿五〉 436・19×

◇七・かゞり火巻▼うち松〈三〉４３７・８○
◇七・野分巻▼かばざくら〈四〉４３７・１７○▼うれへがほなる〈九〉４３８・１○
◇七・藤ばかまの巻▼いかにぞやこだいの云々〈十二〉４４０・１７×▼御使さへぞ云々〈十六〉４４０・１９○
◇八・真木柱巻▼心浅き人のためにぞ云々〈二〉４４３・８×▼〈歌〉おりたちて云々〈六〉４４３・１３○▼さといかけ給ふ〈十五〉４４４・６×▼いといたし〈十七〉４４４・９×▼〈歌〉ながめする云々〈卅五〉４４５・７○▼玉もはなかりそ〈卅六〉４４５・８×
◇八・梅枝巻▼だんのからくみ〈十七〉４４７・２○▼しりびに〈廿〉４４７・５×
◇八・藤末裏葉巻▼けうなかりし〈五〉４４７・１１○▼〈歌〉浅き名を云々〈十〉４４８・７×▼〈歌〉もりにける云々〈十〉４４８・１０×
◇八・上〈ノ〉若菜巻▼おいらかにおほしたて〈四十八〉４５０・１７×▼おぼろけならでは〈八十三〉４５２・４×▼よしあるかゝりのほどを〈九十九〉４５３・７×▼もえぎの陰に〈百〉４５３・８○▼桜ひとつにとまらぬ心よ〈百六〉４５３・１２○
◇八・下〈ノ〉若菜巻▼ねう（ねう）と〈六〉４５３・１８○▼うたてもすゝむかな〈六〉４５４・１○▼ことなるけぢめわかれで〈十七〉４５４・４×▼うへのきぬのいろ（いろ）云々〈廿〉４５４・１２×▼宮の御方をのぞき給へれば〈卅三〉４５５・３×▼〈歌〉おきてゆく云々〈六十五〉４５６・１３○▼さばかりの人に〈八十五〉４５７・５×▼いかにかどあることなりけり〈九十〉４５８・３○
◇八・柏木巻▼物わらひし給ふおとゞの云々〈六〉４５９・４×▼あへなん〈卅一〉４５９・６○▼ふたついは

んには〈卅一〉459・7○▼おぼろけのことならで〈卅七〉459・8×▼おやのけうよりもけに〈卅九〉459・17×▼〈歌〉ことならば云々〈四十二〉460・3×

◇八・よこぶえの巻▼〈御歌〉よをわかれ云々〈三〉460・10×

◇八・鈴虫巻▼〈歌〉大かたの云々〈九〉461・11×▼〈歌〉大かたの云々〈九〉461・11○▼〈歌〉こゝろもて云々〈九〉461・12○

◇八・夕霧巻▼あなたの御せうそこ云々〈五〉462・2○▼くるすののさう〈九〉462・4○▼人々有しまゝに云々〈十七〉462・14×▼心をいたして〈十九〉462・15○▼まいていふかひなく云々〈廿三〉462・17×▼おぼしよわる御心もそひて〈廿五〉462・18×▼けさやかなるけしきにもあらで〈廿六〉463・1○▼めさましげにこゝちよがほに〈廿六〉463・2×▼こよひもつれなきを云々〈廿六〉463・3×▼〈歌〉里とほみ云々〈四十七〉464・8○▼をぐらの山も〈四十八〉464・9○▼〈歌〉なるゝみを云々〈六十七〉465・4○▼たが名かをしき〈七十五〉466・2×

◇八・御法巻▼かた（がた）におはしましては云々〈八〉466・12○

◇八・まぼろしの巻▼〈歌〉さもこそは云々〈十六〉467・15○▼〈歌〉さもこそは云々〈十六〉467・16○▼〈歌〉つれ（づれ）と云々〈十九〉467・19○▼へいまゝでへにける〈廿〉468・3○

◇八・紅梅巻▼なぐさめのこともあらなんと〈五〉470・4○▼さかしきひじりの〈十〉470・11×

◇八・竹川巻▼ゆゝしきかたにてなん云々〈廿六〉474・5×▼〈歌〉ながれての云々〈卅三〉475・2○

◇九・宇治・はし姫巻▼山のはちかきこゝちするに〈十一〉480・6×▼いろなりとかいふめる〈四十四〉482・12○

■湖月師説■

◇九・宇治・あげまきの巻▼わがなみだをば云々〈二〉482・16○▼〈歌〉いづこより云々〈六十二〉486・15○▼〈歌〉きしかたを云々〈九十三〉487・12○▼〈歌〉行末を云々〈九十三〉487・15○

◇九・宇治・早蕨巻▼いはせもりの云々〈六〉488・9×▼〈歌〉しなてるや云々〈十七〉490・5×▼〈歌〉しなてるや云々〈十七〉490・5×▼きくの花うつろひはママ〈四〉490・15○▼あまりにならはし給ひて〈卅二〉491・16×▼くやしきにも又げにねはなかれけり〈四十四〉491・19○▼我こそさきになど〈四十九〉492・2○▼むねはおさへたる云々〈五十八〉493・1○▼けせうにもあれば〈六十七〉494・11○▼あてびても〈十一〉496・5○

◇九・宇治・東屋巻▼見奉りしらずなりにければあるを〈廿五〉497・5○▼おぞき人にて〈卅八〉497・18○▼此御事侍らざらましかば〈四十一〉498・8○▼いたちの侍らむやうなる〈四十七〉498・17○

◇九・宇治・浮舟巻▼〈歌〉まだふりぬ云々〈八〉500・16○▼おやのかふ子は〈四十二〉505・17×▼いざとげなり〈六十七〉508・16○

◇九・宇治・かげろふの巻▼〈歌〉あはれしる云々〈卅六〉512・6×

◇九・宇治・手習巻▼つきしみりやうじたる〈十二〉516・8○

◇九・宇治・かげろふの巻▼今見ん初花のさまし給へるに〈上五十二〉515・16×▼大将の君はいとさしも云々〈上五十二〉515・19×

◇九・宇治・手習巻▼ひとつばしあやふがりて云々〈四十一〉518・15○

◇九・宇治・夢浮橋巻▼ひきぼし〈十一〉522・8○

◇五・帚木巻上▼よろこびに思ひ〈十二〉３４７・１８×
◇六・空蝉巻▼ねびれて〈五〉３７２・２×
◇六・夕顔巻▼〈歌〉ひかりありと云々〈廿三〉３７９・１５×
◇六・若紫巻▼人々まじなひわづらひしを〈二〉３８５・４○▼ところえぬやうなりけれ〈五〉３８５・１８×▼いまそなたにも〈十二〉３８８・１△▼たぐひに〈十二〉３８９・５×
◇六・若紫巻▼をさなき人をぬすみ云々〈四十四〉３９４・１１×▼よし後にも人は云々〈四十七〉３９５・３×
◇七・榊巻▼〈歌〉神垣は云々〈五〉４０５・５○
◇九・宇治・東屋巻▼おもほしわびたるめも〈四十四〉４９８・１５□
◇七・榊巻▼そればかりやまだ云々〈五十一〉４０８・９×
◇七・みをつくしの巻▼はかなきさまにて〈九〉４１７・１０○
◇九・宇治・あげまきの巻▼〈歌〉同じえを云々〈卅一〉４８４・１２○▼ましていかに云々〈九十三〉４８７・１６×
◇九・宇治・宿木巻▼やがてあとたえなましよりは〈十〉４９１・５×
◇九・宇治・手習巻▼こゝちよげなる人を云々〈五十七〉５１９・１２○

■湖月抄（含・湖月本）■

◇一・註釈▼１８０・１８□▼１８１・１○
◇一・湖月抄の事▼１８２・１１△▼１８２・１３×▼１８２・１４×▼１８２・１４×▼１８２・１７×▼１

83・1×▼183・5□

◇四・▼夢浮橋巻315・7×▼夢浮橋巻315・11×▼夢浮橋巻316・6×▼夢浮橋巻316・10□▼夢浮橋巻316・17×

◇五・桐壺巻▼などやうにみだりがはしきを〈十六〉325・8×▼なづさひ〈廿五〉329・14×▼あやしくよそへ聞えつべき〈廿四〉329・17×▼いとようにたりしゆゑ〈廿六〉329・18×▼通ひて見え給ふも〈廿六〉330・2×▼おとゞけしきばみ聞え給ふ〈廿八〉331・14×

◇五・帚木巻上▼おのがじゞ〈四〉335・11×▼きざみ（きざみ）有て〈七〉338・8×▼大かたの世につけて〈九〉341・6×▼かみは下にたすけられ〈九〉341・10×▼されど何か〈十〉342・10×▼やがてあひそひてその思ひいで云々〈十二〉348・17×

◇六・帚木巻下▼かたき世ぞとは云々〈廿一〉357・4×▼かたき世ぞとは云々〈廿一〉357・9×▼虫の音にきほえる〈廿六〉359・17×▼さるかたのこゝろもとなくては〈卅六〉366・4×▼何よけんともえうけ給はらずとかしこまりて〈卅六〉366・7×

◇六・夕顔巻▼さらにことなく云々〈卅七〉380・13×

◇六・若紫巻▼ところえぬやうなりけれ〈五〉385・18×▼僧都きんを云々〈廿一〉390・7×

◇七・榊巻▼御だうの西の対の南に〈四十四〉408・1×

◇七・須磨巻▼御心をしづめ給ひて〈廿五〉411・4×

◇七・みをつくしの巻▼もし思ふさまに〈十九〉418・12×▼かやうのことわざとも〈卅七〉419・7×

◇七・蓬生巻▼のたまひすべして〈廿二〉420・2×

◇七・玉かづらの巻▼此君ととのたまへば〈卅二〉４３２・５×
◇七・とこなつの巻▼やがてかき給へと〈廿六〉４３７・２×
◇七・野分巻▼をりにあはぬよそへどもなれど〈十七〉４３７・４×
◇七・藤ばかまの巻▼かやうにて聞ゆるより云々〈六〉４４０・１３×
◇八・真木柱巻▼わらゝかなるけもなき人にて云々〈卅四〉４４５・３×
◇八・上〈ノ〉若菜巻▼らうたき人をぞえ奉りたると〈七十七〉４５１・１９×
◇八・柏木巻▼ちじの大殿に〈卅九〉４５９・１４×
◇九・宇治・はし姫巻▼一ところ（ところ）世に住つき云々〈九〉４７９・１８×
◇九・宇治・早蕨巻▼かたちもかへてけるを〈十二〉４８９・１６×

■細流抄■

◇一・註釈▼１８０・１７○
◇三・巻々のとし立▼玉かづらの巻２６０〜１９×▼竹川巻２６６・７○▼竹川巻２６６・８×▼竹川巻２６７・２○▼竹川巻２６７・１０×▼紅梅巻２６８・２×▼紅梅巻２６８・３×▼紅梅巻２６９・８×▼橋姫巻〈宇治一〉２７０・７×▼宿木巻〈宇治五〉２７１・１６△
◇五・桐壷巻▼此御にほひには〈四〉３１９・４×▼三位のくらゐ〈九〉３２１・１８○▼などやうにみだりがはしきを〈十六〉３２５・６×▼かしこき御心にやまとさうをおほせて〈廿三〉３２８・７×▼三代（ミヨ）のみやづかへに〈廿二〉３２８・１５×▼ゆゝしう〈三十〉３３２・６×
◇五・帚木巻上▼ひかる源氏名のみこと（ごと）しう云々かた野の少将にはわらはれ給ひけんかし〈二〉３３

3・3○▼おのがじゝ〈四〉335・11×▼かたかどにても〈八〉340・18×▼ところせく思ひたまへぬだに〈十〉342・13○▼又さやかにも云々〈十〉343・1△▼とりなせばあだめく〈十〉343・9×▼そば（そば）しく〈十〉346・17×▼うらみいふべきことをも〈十二〉348・2×▼すみがき〈十五〉351・6×

◇六・帚木巻下▼あいなだのみ〈十九〉354・12×▼御心のまゝに〈廿四〉359・9×▼しれものの物がたり〈廿五〉359・11×▼歌よむと思へる人の〈卅一〉363・11×▼ほゝゆがめて〈卅六〉365・18×▼こととあかくなれば〈四十三〉368・15×▼おぼさるとぞ〈五十〉371・6×

◇六・空蝉巻▼しづまりぬなり〈六〉372・3×

◇六・夕顔巻▼〈歌〉こゝろあてに云々〈六〉374・13×▼〈歌〉よりてこそ云々〈七〉374・17△▼さふらひわらは〈十二〉376・10○▼されたるくれ竹〈十九〉378・1×▼きり（ぎり）すだにまどほに云々〈廿〉378・4×▼〈歌〉山のはの云々〈廿三〉378・17×▼べちなう〈廿三〉379・7×▼〈歌〉ひかりありと云々〈廿三〉379・11×▼けいめいし給て〈四十二〉382・4×▼〈歌〉過にしも云々〈五十二ひら〉384・19×

◇六・若紫巻▼かいりうわうのきさき〈六〉386・4○▼はゝこそ〈七〉386・6×▼なさけなき人になりゆかば〈七〉386・8×▼いまそなたにも〈十二〉388・4×▼まして後の世の〈十二〉388・6×▼御なほしなどは云々〈廿八〉392・1×▼ふりはへつかはし〈卅五〉392・16×▼わりなきことと〈卅七〉393・5×▼あつしくさだ過給へる人に云々〈四十一〉393・16×▼ひきさげて〈四十七〉395・5×

◇七・紅葉賀巻▼花のかたはらの云々〈二〉400・1×

◇七・榊巻▼〈歌〉なげきつゝ云々〈廿〉４０６・１０×▼〈歌〉月のすむ云々〈四十二〉４０７・１６×
◇七・須磨巻▼つくりゑを云々〈卅四〉４１１・１９×▼〈歌〉うしとのみ云々〈卅六〉４１２・４×▼ふすまをはりたらんやうに〈四十九〉４１３・１９×
◇七・明石巻▼うつゝの人の云々〈十〉４１４・１５○
◇七・みをつくしの巻▼さこそあなれ〈十二〉４１７・１７×▼おほいとのの御子にて〈卅八〉４１９・１２×
◇七・絵合巻▼左なほ数ひとつ云々〈十八〉４２２・２×
◇七・薄雲巻▼こゝろえずと〈卅三〉４２６・４×
◇七・朝顔巻▼かつは〈七〉４２７・３×
◇七・をとめの巻▼風のちからけだしすくなし〈十九〉４２９・８×
◇七・行幸巻▼此としごろ云々〈十三〉４３９・６×
◇八・真木柱巻▼さといかけ給ふ〈十五〉４４４・２○▼玉もはなかりそ〈卅六〉４４５・８×
◇八・上〈ノ〉若菜巻▼おぼろけならでは〈八十三〉４５２・４×▼おぼろけならでは〈八十三〉４５２・４○
◇八・下〈ノ〉若菜巻▼青にびのおもておりて〈廿〉４５４・１４×
◇八・柏木巻▼〈歌〉ことならば云々〈四十二〉４６０・２×
◇八・よこぶえの巻▼いろこのみかな〈六〉４６０・１１×
◇九・宇治・はし姫巻▼かぎりある身にて〈三〉４７７・８×▼中将の君は中々云々〈十二〉４７７・１３×▼をしへよせ奉れり〈廿〉４７８・７×
◇九・宇治・あげまきの巻▼ことに出てはいかでかは云々〈廿〉４８３・１７×▼いつきすゑたらむ姫君も云々

〈五十一〉４８６・１１×▼ましていかに云々〈九十三〉４８７・１６○
◇九・宇治・宿木巻▼思ひくらぶる心もことになくて〈廿一〉４９１・１１×▼我こそさきになど〈四十九〉４９２・２×▼めづらかなる事なめれば〈五十四〉４９２・１１×▼みたらし河ちかき〈六十〉４９３・８×▼こたになど〈七十二〉４９４・３○▼うつろひはてで〈七十四〉４９４・８×
◇九・宇治・東屋巻▼おりてはすこし云々〈六十四〉５００・８○
◇九・宇治・かげろふの巻▼御心はさるものにて云々〈四十九〉５１３・１０○

■紫家七論■

◇一・此源氏の物語の作りぬし▼１７４・１３×
◇一・つくれるゆゑよし▼１７６・１６○
◇一・作れる時世▼１７７・１０○
◇一・註釈▼１８１・６○▼１８１・８×
◇二・なほおほむね▼２２８・１４×▼２２８・１７×▼２２８・１９×▼２２９・５×

■抄■

◇七・みをつくしの巻▼さこそあなれ〈十二〉４１７・１７○▼雲ゐはるかに〈廿四〉４１８・１３○
◇八・よこぶえお巻〈六〉４６０・１１○
◇九・宇治・あげまきの巻▼つれなき物から〈九十四〉４８７・１７○
◇九・宇治・東屋巻▼おりてはすこし云々〈六十四〉５００・８×

■諸抄■

◇一・紫式部が事▼175・3△▼176・2×
◇一・作れる時世▼177・9○
◇一・准據▼178・14×
◇一・くさ（ぐさ）の事▼180・1×
◇一・引歌といふものの事▼182・8×
◇三・巻々のとし立▼帚木巻254・11×▼空蟬巻　夕顔巻255・2×▼玉かづらの巻259・15×▼玉かづらの巻260・11×▼玉かづらの巻260・14×▼玉かづらの巻261・6×▼玉かづらの巻261・13×▼玉かづらの巻261・15×▼玉かづらの巻262・1×▼玉かづらの巻262・3×▼初音巻　胡蝶巻　蛍巻　常夏巻　かゞりびの巻　野分巻262・7×▼下〈ノ〉若菜巻264・7×▼雲隠巻265・12□▼椎本巻〈宇治二〉270・16×▼宿木巻〈宇治五〉272・2△▼人々のとし立276・1×
◇六・夕顔巻▼かやうのすぢなども云々〈廿一〉378・11×
◇七・末摘花巻▼兵部〈ノ〉大輔〈三〉398・4×
◇七・榊巻▼〈歌〉あふことの云々〈廿五〉406・17×
◇七・須磨巻▼うまやのをさに云々〈卅八〉412・10×
◇七・絵合巻▼こゝろ葉〈三〉421・2×▼かみゑはかぎり有て〈十七〉421・17×
◇七・藤ばかまの巻▼ついでをたがへて〈十〉440・10×
◇八・梅枝巻▼さきの朱雀院〈七〉445・16×

◇六・帚木巻下▼をのこしもなんしさいなき物は侍める〈廿九〉３６２・７×

■水源抄■

◇九・宇治・はし姫巻▼扇ならでこれしても月はまねきつべかりけり〈廿〉４７８・９○

■説■

◇一・此源氏の物語の作りぬし▼１７４・１５×

◇三・巻々のとし立▼紅梅巻２６９・４×

■箋■

◇八・夕霧巻▼まいていふかひなく云々〈廿三〉４６２・１７×

■宗祇（含・宗祇抄、宗祇注）■

◇五・桐壷巻▼国のおやとなりて云々　又其相たがふべし〈廿一〉３２７・１９×

◇五・帚木巻上▼さればみたるも〈十五〉３５０・１５×▼いとゞかゝるすきごとどもを３３３・１５×▼思ひ出わらひ〈十〉３４５・６×▼あはれともうちひとりごたるゝに〈十〉３４５・９×▼猶じちになんよりける〈十五〉３５１・１６×

◇六・帚木巻下▼やまとなでしこをば云々〈廿六〉３５９・１９×▼いとかうかりなるうきねのほどを〈四十二〉３６８・５×

■玉勝間■

◇七・をとめの巻▼御としみの事〈五十一〉４３０・５○

■ちかき諸抄（青表紙本文と）■

◇一・くさ（ぐさ）の事▼１８０・４×

■注■

◇五・桐壷巻▼いづれの御時にか〈二〉３１７・５×▼はじめよりわれはと〈二〉３１７・６×▼人の心をうごかし〈二〉３１７・１０×▼あいなく〈三〉３１８・１×▼心ぐるしう〈四〉３１９・１１×▼まみなどもいとたゆげにて〈七〉３２０・１４×▼うちすててはえゆきやらじ〈七〉３２１・３×▼御むねつとふたがりて〈八〉３２１・１０×▼もろともにはぐゝまぬおぼつかなさを〈十二〉３２３・２×▼むかしの形見になすらへて物し給へ〈十二〉３２３・７×▼たい（だい）しき〈十九〉３２７・１×▼中々あやふく〈廿〉３２７・４×▼国のおやとなりて云々　又其相たがふべし〈廿一〉３２７・１９×▼おほやけごとにつかうまつれる〈廿六〉３３０・１９△▼御やすみどころにまか〈ン〉で給ひて云々〈廿七〉３３１・９×▼御ひとへごゝろ〈卅一〉３３２・１３×

◇五・帚木巻上▼をさ（をさ）たちおくれず〈三〉３３５・４×▼おひさきこもれる窓のうちなる〈五〉３３６・１６×▼きゝにくき事〈六〉３３８・２×▼とり（どり）に〈六〉３３８・７×▼こと人のいはむやうに云々〈七〉３３９・８×▼うちあひてすぐれたらむも〈七〉３３９・１４×▼たらはであしかるべき大事ども〈九〉３４１・１６×▼同じくは我ちからいり云々〈同〉３４２・１×▼心に及ばず〈十〉３４２・１２×▼いとよくもてかくすなりけり〈十〉３４３・３×▼又まめ（まめ）しき云々〈十〉３４４・２×▼おほやけはらだゝしく〈十〉３４５・１×▼いとくちをしく〈十〉３４６・９×▼なほくるしかるらん〈十〉３４６・１３×▼くまなき物いひも〈十〉３４７・２×▼さだめかねて〈十〉３４７・４×▼ねぢけがましきおぼえ〈十〉３４７・１０×▼よるべ〈十二〉３４７・１２×▼心ばせうちそへたらんをば〈十二〉３４７・１５×▼たぢろきに

〈十四〉３４９・９〇▼よろづの事なだらかに〈十四〉３４９・１１×▼ともかくもたがふべきふしふらむを云々〈十四〉３５０・６×▼ひゞらきゐたり〈十四〉３５０・１１×▼うるはしき人のてうどの〈十五〉３５１・１×▼すくよかならぬ山のけしき〈十六〉３５１・９〇▼猶じちになんよりける〈十五〉３５１・１５×

◇六・帚木巻下▼すくめるかたに〈十七〉３５３・６×▼いひそし〈十八〉３５４・８×▼いひそし〈十八〉３５４・８〇▼〈歌〉手ををりて云々〈十九〉３５４・１９×▼はかなき花もみぢといふも云々〈廿一〉３５６・１３×▼もとつけたらむ有さまに見えて〈廿五〉３５９・１４×▼はなのわたりをこめきて〈廿九〉３６２・１０×▼おいらかに云々〈卅〉３６３・１×▼などかはさても〈卅二〉３６４・１９×▼何よけんともえうけ給はらずとかしこまりて〈卅六〉３６６・５×▼さりともまうとたちの云々〈卅七〉３６６・１３×▼あはめられ〈四十一〉３６７・１１×▼見ざらましかば云々〈四十二〉３６７・１３×▼〈歌〉身のうさを〈四十三〉３６８・１１×▼〈歌〉めさへあはでぞ〈四十六〉３６９・１３×▼ふつゝかなる〈四十六〉３６９・１８×▼いとつきなかるべく〈四十七〉３７０・２×▼思へりしけしきの〈四十七〉３７０・５×▼人げなき有さま〈四十七〉３７０・１０×▼まばゆければ〈四十七〉３７０・１１×▼ふようなるよしを〈四十九〉３７０・１６×▼〈歌〉かずならぬ云々〈五十〉３７１・１×▼すさましく〈五十〉３７１・３×

◇六・空蟬巻▼はうそくなる〈四〉３７１・１２×▼ねびれて〈五〉３７２・１〇▼さかし〈六〉３７２・４×▼なほ（なほ）しく〈九〉３７２・１２×

◇六・夕顔巻▼かたほ〈五〉３７４・５×▼おしなべたらぬ人の御すくせ▼げにわかき女どもの云々〈八〉３７５・７×▼されどよそなりし云々〈十一〉３７６・３×▼ねふたげなるむしきに云々〈十一〉３７６・８×▼わがかなしと思ふむすめを〈十二〉３７６・１１×▼なか屋〈十三〉３７６・１５×▼けさうの人の云々〈十五〉

377・8×▼人のけはひいとあさましく云々〈十六〉377・10×▼心ばみたる〈廿〉378・5×▼なもたうらいのだうし云々〈廿一〉378・8×▼まだかやうなる事を云々〈廿二〉378・15×▼何心もなく云々〈廿六〉380・3×▼なにかこと（ごと）しく云々〈卅七〉380・16×▼たい（だい）しき〈卅七〉380・17×▼とあるもかゝるも云々〈卅九〉381・2×▼火をとりそむけて〈卅七〉▼381・1□▼うちかはし給へりしが云々〈四十〉381・16×▼まことにふし給ひ云々〈四十一〉382・2○▼御名がくしも云々〈四十三〉382・10×▼御名がくしも云々〈四十三〉382・10○▼あやしやいかに思ふらんと〈四十八〉383・14×▼しにかへり〈四十八〉383・15×▼心うしと思へど〈四十八〉383・18×▼あみだ仏にゆづり〈五十〉384・10×▼〈歌〉なく（なく）も云々〈五十〉384・11×▼〈歌〉せみのはも云々〈五十一〉384・14×

◇六・若紫巻▼いといたし〈五〉385・12×▼心をやれるすまひ〈五〉385・15×▼ところえぬやうなりけれ〈五〉385・18×▼したひ給ふほどよ〈九〉387・6×▼かんざし〈九〉387・10×▼女は人にもてなされて云々〈十五〉388・15×▼仏の御しるべは云々〈十六〉388・19×▼中々にも〈十九〉389・15×▼思ひ給ふるさまをも云々〈廿五〉390・18×▼まほならねども云々〈廿六〉391・9×▼〈歌〉くみそめて云々〈廿七〉391・11×▼ものふかきおまし所に〈卅二〉392・7×▼此世の事には云々〈卅三〉392・8×▼〈歌〉いはけなき云々〈卅四〉392・12×▼めざましからん〈卅七〉393・4×▼いと忍びて通ひ給ふところの云々〈四十〉393・10×▼たはぶれにても〈四十三〉394・1×▼ひたちには云々〈四十四〉394・9×▼ふくよかに〈五十一〉395・15×▼これはいとさまかはりたる云々〈五十三〉396・2×

◇七・末摘花巻▼ところせんもある〈十九〉３９８・１７×▼えかたのやうにも云々〈廿〉３９９・１×▼えゆるすまじく〈卅〉３９９・６×▼たゝうめの花の〈卅二〉３９９・９×

◇七・紅葉賀巻▼中々なるこゝちの〈十七〉４００・１２×

◇七・葵巻▼あまりのなんも云々〈卅六〉４０４・２×

◇七・榊巻▼いでや〈三〉４０５・１×▼たけからねば〈五〉４０５・４×▼八省に〈十一〉４０５・６×▼はらぎたなきかたへの云々〈廿〉４０６・６×

◇七・須磨巻▼さまことなる罪〈六〉４０９・７×▼たゝみところ（どころ）云々〈十〉４０９・１５×▼例の月の云々〈十三〉４１０・３×▼あけぐれ〈十四〉４１０・６×▼〈歌〉なきかげや云々〈十九〉４１０・０１×▼〈歌〉友千鳥云々〈四十一〉４１３・１×▼いかに物し給ふ君ぞ〈四十三〉４１３・２×

◇七・明石巻▼ついたちの日の夢に〈九〉４１４・１３×▼我ながらかたじけなく〈三〉４１４・５×▼かきなでの心やり〈十九〉４１６・１×▼来ゐたりけるもしるければ〈廿四〉４１６・３×▼〈歌〉思ふらむ云々〈廿五〉４１６・５〇▼よこもりて〈廿八〉４１６・８×▼引ならされたる〈卅一〉４１６・１１×

◇七・みをつくしの巻▼〈歌〉かずならぬ云々〈十六〉４１８・７×▼心にものこすまじうこそは〈卅六〉４１９・４×

◇七・蓬生巻▼うしろやすくをと〈十九〉４２０・１×

◇七・関屋巻▼関屋よりさとはづれ出たる〈三〉４２０・１２×▼〈歌〉ゆくとくと云々〈三〉４２０・１４×

◇七・松風巻▼つなし〈四〉４２２・１２×▼我も思ひなきにしもあらざしりを〈廿〉４２４・７×

◇七・薄雲巻▼又みこたち大臣の御はらといへど云々〈四〉４２５・４×▼たゞよのつねのおぼえに云々〈十三〉

425・16×▼たゞ御ため云々〈卅五〉426・11×
◇七・朝顔巻▼〈歌〉見しをりの云々〈七〉426・18×▼ふくつけがれど〈廿一〉428・3×▼今もいみしく云々〈廿四〉428・5×
◇七・をとめの巻▼おろす〈八〉428・10×▼又さもこそあらめ〈卅一〉429・11×▼その人ならぬを〈四十一〉429・16×▼みどりのうすやうに〈四十二〉429・18×▼いそぎたちにけり〈四十二〉430・1×▼ふみをだにえやり給はず〈四十二〉430・2×
◇七・玉かづらの巻▼今は御さいはひ〈九〉430・13×▼此人の云々つらく思はれむを〈十二〉431・1
△△▼ふる物あつかひ〈卅八〉432・16×▼ふる物あつかひ〈卅八〉432・17×
◇七・初音巻▼心まどはし給ひし世の〈十四〉433・10×▼もてしづめ云々〈十八〉433・15×
◇七・こてふの巻▼〈歌〉ふちに身を云々〈七〉433・17×▼深き御心もちひや云々〈十〉434・4×
◇七・蛍巻▼〈歌〉にほとりに云々〈十四〉435・4×
◇七・とこなつの巻▼ふだうのだらによみ〈十七〉436・6×▼たゞそのつみのむくひなり〈廿二〉436・12×▼いとふにはゆる〈廿五〉436・17×
◇七・かゞり火巻▼なほざりのかごとにても〈二〉437・6×
◇七・行幸巻▼いふかひなきにゆるし〈十一〉437・18×▼まちとり云々438・2×▼〈歌〉をしほ山云々〈六〉438・11×▼よだけ〈よだけ〉〈七〉438・13×▼まちとり云々〈十一〉439・2×
◇七・藤ばかまの巻▼〈歌〉たづぬるに云々〈六〉440・6×▼御使さへぞ云々〈十六〉440・19×
◇八・真木柱巻▼心浅き人のためにぞ云々〈二〉443・8×▼〈歌〉心さへ云々〈十六〉444・7×▼〈歌〉

かきたれて云々〈卅五〉４４５・６×

◇八・梅枝巻▼〈歌〉めづらしと云々〈十〉４４６・１０×▼又なきことと云々〈十〉４４６・１２×

◇八・藤末裏葉巻▼あまけなりと〈三〉４４７・８×▼としへにける此家の〈九〉４４７・１８×▼としへにける此家の〈九〉４４８・１×▼〈歌〉浅き名を云々〈十〉４４８・７×▼〈歌〉もりにける云々〈十〉４４８・１０×▼年月のほどしられ侍れば云々〈十八〉４４８・１９×

◇八・上〈ノ〉若菜巻▼世をたもつさかりのみこにだに云々〈廿八〉４５０・１×▼〈歌〉身をなげむ云々〈五十六〉４５１・３×▼よこさまの人の〈九十二〉４５２・８×▼えなのめならざめるは〈九十五〉４５２・１５×

◇八・下〈ノ〉若菜巻▼さいへどならびなし〈廿九〉４５４・１８×▼よろづの物の音のうちにしたがひて〈卅九〉４５６・２×▼なにしに奉りつらむと〈六十三〉４５６・１０×▼うつし人にてだに云々〈七十四〉４５７・２×▼げにあながちに思ふ人のためには云々〈八十七〉４５７・７×▼ゑかうにはあまねきかたにても云々〈九十二〉４５８・７×▼いたりすくなくたゞ人の云々〈九十七〉４５８・１３×▼れいならずなやみわたりて〈百〉４５８・１６×▼たれも（たれも）〈百一〉４５８・１８×

◇八・柏木巻▼物わらひし給ふおとゞの云々〈六〉４５９・４×▼おやのけうよりもけに〈卅九〉４５９・１６×

◇八・よこぶえの巻▼これはまばゆくなむ〈十二〉４６０・１５×

◇八・鈴虫巻▼みちをかくしほろゝけて〈二〉４６１・６×

◇八・夕霧巻▼ひたやごもり〈卅三〉４６３・１３×▼ことといへば〈六十一〉４６５・１×

◇八・まぼろしの巻▼〈歌〉夏ごろも云々〈十五〉467・14×
◇八・にほふ宮巻▼〈歌〉おぼつかな云々〈七〉469・14×
◇八・紅梅巻▼うらみて後ならましかば〈十一〉470・13×
◇八・竹川巻▼これはげんじの云々〈二〉470・17×▼にほひが〈九〉472・4×▼〈歌〉竹川に云々〈十四〉473・2×▼なぐさめさせ給へ〈廿〉473・12×▼ゆゝしきかたにてなん云々〈廿六〉474・4×▼としごろ申〈シ〉給ひしは云々〈卅六〉475・14×
◇九・宇治・はし姫巻▼〈歌〉おく山の云々〈卅一〉480・17×▼心のふかくしみ給ふべかめる云々〈卅五〉481・16×
◇九・宇治・あげまきの巻▼いかにおぼしおきたるかたの云々〈五〉483・4×▼ことよがり〈六〉483・5×▼もてはなれ給はざらんと〈十〉483・9×▼さるべき人のおはせず〈廿四〉483・18×▼例のおかしく云々〈廿八〉484・5×▼何かこれは云々〈廿八〉484・7×▼すてがたくおとしおき〈卅〉484・10○▼いかなりけるとかは云々〈卅八〉485・2×▼おろかならぬ云々〈四十〉485・4×▼〈歌〉さよごろも云々〈四十五〉485・8×▼おなじ御さわがれにこそは〈四十七〉485・16×▼見おとりする御心を云々〈六十三〉487・1×▼けぶりもおほくむすほぼゝれ給はず〈八十七〉487・11×
◇九・宇治・早蕨巻▼〈歌〉君にとて云々〈二〉488・6×
◇九・宇治・宿木巻▼いとほしの人ならはしやとぞ〈五十五〉492・18×▼〈歌〉やどり木と云々〈七十二〉494・5×▼しん殿をゆづり聞え云々〈八十三〉494・19×
◇九・宇治・浮舟巻▼心もかなりける夜のあやまちを〈十九〉502・2×▼すゞろなる事も〈廿七〉503・

7×▼我すむかたを〈卅九〉５０５・７×▼そのほどかの人に〈四十一〉５０５・１４×▼大蔵たいふなるものに云々〈四十六〉５０６・１６×

◇九・宇治・かげろふの巻▼さる人のおはしおはせず云々〈十一〉５０９・１８△▼大将殿のからうして云々〈卅六〉５１１・１５△▼此よろこび〈卅六〉５１２・１６×▼くはしくはきかせ奉らぬにや〈四十六〉５１３・８×▼かぎりあれば宮の君など云々〈五十〉５１３・１４×

◇九・宇治・手習巻▼まゐり物の所に云々〈五〉５１５・４×▼おなじくはなど云々〈廿三〉５１６・１７×▼人の物いひをさすがに云々〈廿六〉５１７・８×▼〈歌〉山里の云々〈四十〉５１８・１３×▼いとはづかしくなんおぼしける〈五十六〉５１９・８×▼山伏はかゝる日にぞ云々〈五十六〉５１９・１０×

◇九・宇治・夢浮橋巻▼たまどのにおきたりけん云々〈六〉５２２・３×

■注或説■

◇六・夕顔巻▼こまやかなることども〈五十二〉３８４・１３×

■注釈ども■

◇一・大むね▼（総論）１８６・６×▼よくいへば、すべて何事も、むなしからずなりぬやと、物語を、いとわざとの事に、のたまひなしつ、１９６・５×▼よくいへば、すべて何事も、むなしからずなりぬやと、物語を、いとわざとの事に、のたまひなしつ、１９６・６×▼よくいへば、すべて何事も、むなしからずなりぬやと、物語を、いとわざとの事に、のたまひなしつ、１９６・９×▼よくいへば、すべて何事も、むなしからずなりぬやと、物語を、いとわざとの事に、のたまひなしつ、１９６・１０×▼よくいへば、すべて何事も、むなしからずなりぬやと、物語を、いとわざとの事に、のたまひなしつ、１９６・１１×▼よくいへば、すべて何事も、むな

しからずなりぬやと、物語を、いとわざとの事に、のたまひなしつ、１９６・１４×▼よくいへば、すべて何事も、むなしからずなりぬやと、物語を、いとわざとの事に、のたまひなしつ、１９６・１６×▼よくいへば、すべて何事も、むなしからずなりぬやと、物語を、いとわざとの事に、のたまひなしつ、１９６・１８×▼よくいへば、すべて何事も、むなしからずなりぬやと、物語を、いとわざとの事に、のたまひなしつ、１９７・３×

◇二・なほおほむね▼２２６・１４○

■注ども■

◇五・帚木巻上▼さればみたるも〈十五〉３５０・１４×

◇六・空蟬巻▼すこししなおくれたり〈五〉３７１・１５×

◇六・夕顔巻▼むね（むね）しからぬ〈三〉３７３・１５×▼されたる〈三〉３７３・１８×

◇七・花宴巻▼よの中のあやまち〈五〉４０１・１６×▼聞えたがへたるもじかな〈六〉４０２・１×

◇七・明石巻▼〈歌〉なげきつゝ云々〈四十六〉４１７・６×

◇七・朝顔巻▼かつは〈七〉４２７・４×▼につかはしき御よそへに〈八〉４２７・７×

◇八・夕霧巻▼あだへかくして〈卅二〉４６３・１０×▼〈歌〉まつしまの云々〈六十七〉４６５・７×

◇八・御法巻▼かた（がた）におはしましては云々〈八〉４６７・１×

◇八・竹川巻▼蔵人〈ノ〉少将の月の光に云々〈卅三〉４７４・１７×▼〈歌〉ながれての云々〈卅三〉４７５・４×▼こおとゞの御心をおぼして〈卅六〉４７５・１１×

◇九・宇治・はし姫巻▼何事にもあるにしたがひて云々〈卅四〉４８１・１×▼くづれそめては云々〈卅四〉４８１・９×▼わが御みづからのこととは〈卅五〉４８２・１×

◇九・宇治・あげまきの巻▼けさやかにおとなびても云々〈五〉483・2×▼ひたやごもりにては云々〈卅六〉484・15×

◇九・宇治・早蕨巻▼屋どをばかれじと〈十〉488・19×▼〈歌〉ながむれば云々〈十六〉490・2×

◇九・宇治・東屋巻▼母君たつやと〈五十四〉499・8×▼なほ（なほ）しき事どもを〈五十四〉499・9×

◇九・宇治・手習巻▼うつし人になりて云々〈六十九〉520・9×

■後の抄ども■

◇一・くさ（ぐさ）の事▼179・15×

■後の抄ども（花鳥餘情以後）■

◇一・引歌といふものの事▼182・3○

■後の抄ども（河海抄以後）■

◇一・引歌といふものの事▼182・7×

■長谷川〈ノ〉常雄■

◇九・宇治・早蕨巻▼〈歌〉袖ふれし云々〈十一〉489・4○

■はやくの注釈ども■

◇七・（総論）▼397・4×

■万水一露■

◇一・註釈▼180・18□

◇五・桐壷巻▼おとゞけしきばみ聞え給ふ〈廿八〉３３１・１３○
◇六・帚木巻下▼やとおびゆれど〈卅九〉３６７・２○
◇六・夕顔巻▼ふりはなれぬるかな〈五十二〉３８４・１５○
◇九・宇治・はし姫巻▼まだきにおぼゝれ〈廿五〉４７８・１５○

■ふるき抄ども■

◇八・雲隠巻▼（総論）４６９・５×
◇九・宇治・夢浮橋巻▼（総論）５２１・１５×

■ふるき注ども■

◇八・まぼろしの巻▼〈歌〉さもこそは云々〈十六〉４６７・１７×
◇九・宇治・浮舟巻▼〈歌〉まだふりぬ云々〈八〉５０１・３×

■傍注■

◇五・桐壷巻▼よせおもく〈三〉３１９・２○▼いかさま〈七〉３２０・１６△▼はかなく聞えいづる言の葉も〈十〉３２２・１２×▼なく〈なく〉〈十四〉３２４・１×
◇五・帚木巻上▼そのかたどもなき人は〈五〉３３７・１４×▼かしこしとても〈九〉３４１・８×▼うちもゑまれ〈十〉３４４・１４×▼とかくひきつくろひて〈十〉３４５・１８×▼すみがき〈十五〉３５１・６×
◇六・帚木巻下▼みさをにもつけて〈十八〉３５３・９×▼けしきばめるせうそこ〈廿〉３５５・１１×▼かゞやかしからず〈廿一〉３５６・２×▼うちとけるかたにて〈廿二〉３５７・１８×▼何事をとり申さん〈廿八〉３６１・１４×▼なまめきたり〈四十三〉３６８・９×

◇六・空蝉巻▼たゝみひろげてふす〈七〉３７２・６×▼けしうはあらぬおもとの云々〈十〉３７２・１８×▼うへにやさふらひ給ひつる〈九〉３７３・１×

◇六・夕顔巻▼物まめやかなるおとなを云々〈十〉３７５・１７×▼惟光があづかりの〈十三〉３７６・１４×▼いざいと心やすき云々〈十七〉３７７・１６×▼かしこくもとめ〈卅五〉３８０・１１×▼たゞ今のからを見では云々〈卅八〉３８０・１８×▼かなしきことをばさる物にて〈卅九〉３８１・３×▼とさまかうさまにつけて〈四十五〉３８２・１９×

◇六・若紫巻▼やう（やう）なりつる物を〈九〉３８７・３×▼御なほしなどは云々〈廿八〉３９２・１○▼かゝる朝霧をば〈四十六〉３９４・１９×▼おもひやりなきほどの事に〈四十七〉３９５・２×▼びんなし〈五十一〉３９５・１９×

◇七・末摘花巻▼手さぐりの云々〈廿二〉３９９・３×

◇七・紅葉賀巻▼かた（がた）うつろふこゝちして〈十六〉４００・１０×

◇七・榊巻▼いふよしなき〈廿六〉４０７・１×

◇七・花散里巻▼〈歌〉人めなく云々〈五〉４０８・１６△

◇七・みをつくしの巻▼身もいとたけく云々〈十六〉４１８・５×

◇七・薄雲巻▼思ふことしてしがなと〈卅五〉４２６・６×

◇七・玉かづらの巻▼いとかなしき妻子（メコ）もわすれぬ〈十五〉４３１・８×

◇八・上〈ノ〉若菜巻▼いづかたにつけても〈卅六〉４５０・６×

◇八・下〈ノ〉若菜巻▼みなひとしく〈卅八〉４５５・１６×▼本の御おぼえ〈七十二〉４５６・１９×

◇八・鈴虫巻▼あやのよそひにて〈五〉４６１・７×
◇九・宇治・あげまきの巻▼げに心もしらざりけりと〈廿七〉４８４・３×
◇九・宇治・早蕨巻▼おまへの梢も霞へだてて云々〈十九〉４９０・１０×▼わがためはをこがましき云々〈廿〉４９０・１２×
◇九・宇治・宿木巻▼なにをかはなどの給はする〈六〉４９０・１８×▼やがてあとたえなましよりは〈十〉４９１・５×▼こなたにおはしますほどなりければ云々〈七十八〉４９４・１３×
◇九・宇治・浮舟巻▼人のしたるわざかは〈十九〉５０２・５×▼いさや右近はとてもかくても云々〈六十〉５０８・１２×
◇九・宇治・かげろふの巻▼すゞろなるわざかな〈卅二〉５１１・１３×▼おどろかし聞えぬとこそは〈四十二〉５１２・５×
◇九・宇治・夢浮橋巻▼これこそはさはたしかなる云々〈十三〉５２２・１４×

■明星抄■
◇一・註釈▼１８０・１８□

■岷江入楚■
◇一・註釈▼１８０・１８□

■孟津抄■
◇一・註釈▼１８０・１８□
◇五・帚木巻上▼〈むつれ聞え〈三〉３３５・６×

◇六・帚木巻下▼ほゝゆがめて〈卅六〉３６５・１８×
◇六・夕顔巻▼さらにことなく云々〈卅七〉３８０・１３×▼いとしも人に〈四十六〉３８３・３○▼物づゝみし〈四十六〉３８３・５×
◇六・若紫巻▼〈歌〉おく山の云々〈廿〉３８９・１８×▼よし後にも人は云々〈四十七〉３９５・３×
◇七・みをつくしの巻▼〈歌〉あらかりし云々〈廿四〉４１８・１４×
◇九・宇治・宿木巻▼みたらし河ちかき〈六十〉４９３・６×
◇九・宇治・手習巻▼つきたる人物はかなき〈十五〉５１６・９○

■弄花抄■

◇一・註釈▼１８０・１７○
◇五・桐壺巻▼三位のくらゐ〈九〉３２１・１８○▼などやうにみだりがはしきを〈十六〉３２５・７×▼三代（ミヨ）のみやづかへに〈廿二〉３２８・１５×▼うへの命婦〈廿八〉３３１・１５×
◇五・帚木巻上▼おのがじゝ〈四〉３３５・１１×▼すみがき〈十五〉３５１・６×
◇六・帚木巻下▼あいなだのみ〈十九〉３５４・１２×▼いまめきたる物のこゝ〈廿三〉３５８・１７○▼げによろしきおまし所にも〈卅四〉３６５・７○
◇六・夕顔巻▼〈歌〉ひかりありと云々〈廿三〉３７９・１１×
◇六・若紫巻▼ふせごのうちに〈九〉３８７・１×▼とこ奉る見給ひて〈廿〉３９０・２×
◇七・須磨巻▼つくりゑを云々〈卅四〉４１１・１９×▼〈歌〉うしとのみ云々〈卅六〉４１２・４○
◇七・みをつくしの巻▼さこそあなれ〈十二〉４１７・１７×▼おほいとのの御子にて〈卅八〉４１９・１２×

◇七・朝顔巻▼いひこしほどに〈十四〉　427・14○
◇八・下〈ノ〉若菜巻▼内よりはたび（たび）云々〈八十六〉　457・6×
◇八・よこぶえの巻▼〈御歌〉よをわかれ云々〈三〉　460・10×
◇八・夕霧巻▼まいていふかひなく云々〈廿三〉　462・17×
◇九・宇治・はし姫巻▼をしへよせ奉れり〈廿〉　478・7×▼おい人にまぎらはし給ひつ〈卅九〉　482・10○
◇九・宇治・東屋巻▼大夫はたゞいまなん云々〈四十〉　498・3×

〈注〉

（1）『湖月抄』は、講談社学術文庫版を主に使用し、適宜板本との照合を行っている。『岷江入楚』は、中田武司編『岷江入楚』〔源氏物語古注釈集成11〕（桜楓社、昭五五・二・二〇）を使用した。

（2）杉田昌彦「宣長手沢本『湖月抄』書入について」、国語と国文学（東京大学国語国文学会）七十巻九号、平五・九
杉田昌彦「宣長源氏学の形成―手沢本『湖月抄』書入を中心に―」、鈴屋学会報（鈴屋学会）十号、平五・十二
高橋俊和「『紫文要領』の成立―詩歌論としての「物のあはれ」―」、鈴屋学会報（鈴屋学会）十号、平五・十二

（3）『本居宣長全集　四』（昭四四、筑摩書房）の大野晋による解題に従う。
宣長は、「紫文要領巻上」を「源氏物語玉の小琴一の巻」、「紫文要領巻下」を「源氏物語玉のを琴二の巻」と改めたが、この補訂は契沖仮名遣によってなされている。従って、補訂の時期は明和五年（一七六八）以後であろう。『石上稿』の仮名遣の調査及び『草庵集玉箒』の序文の記述などによって、宣長は明和五年以降、契沖仮名遣に転向したことが知られるからである。また、この補訂の時期はおそらく安永八年（一七七九）十一月以前であろう。というのはこの「源氏物語玉の小琴」とい

う題名は、後に『源氏物語玉の小櫛』と改められたのであり、安永八年十一月には『万葉集玉の小琴』という、『万葉集』の注釈書が成就しているからである。宣長は「玉の小琴」という名称を、『万葉集』の方へ移したものと考えられる。

（4）『宝暦二年以後購求謄写書籍』。なお、日野龍夫の推定によれば、『都考抜書』から、寛延元年（一七四八）十九歳時点には、『湖月抄』抄出が行われていたとされる（「宣長の読書生活」〔『本居宣長集』（新潮日本古典集成）所引〕、昭五八・七、新潮社）。

（5）前掲杉田論文